

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2016年7月 NO.192



[もくじ]

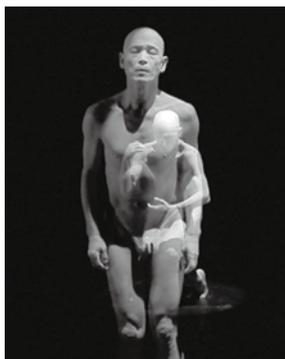
- 2～3 ブトーっていったい何じゃらほい!…大村憲子
- 4～5 赤れんが商家の過去・現在・未来をつなぐ—絵金のまち・赤岡町家再生活用プロジェクト—北山めぐみ
- 6～7 オークランド（ニュージーランド）個展旅日記③…西悟
- 8～9 ピノキオさんが生まれた国で（第四回）～普段着でイタリア～…並河咲耶
- 10～11 高知の「フクちゃん」～フクちゃんが生まれて八十年…奥田奈々美
- 12～13 高知市文化振興事業団5月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

ブトーっていったい何じやらほい!

大村 憲子

舞踏マスター桂勘、原田伸雄両氏の指導協力を仰ぎ、高知初舞踏イベントを来年に向けて企画中です。

桂勘は土方巽直系、白虎社を経てアメリカ、ヨーロッパ、アジアその他各国で活動、国内外で大勢のダンサーを掘り起こしている。又プロフェッサーとして海外の大学等で舞踏を講義。舞踏の定義、



桂勘

体系を整理、位置付ける試みを重ねている。柔軟でフラットな視線、感覚の鋭さは特筆に値する。時折見せる京都人らしい意地悪さがスパイスを利かせている。

原田伸雄は大野一雄、笠井叡直系、舞踏「青龍會」を東京、続いて福岡に立ち上げ主宰、後進を育成。河合文化教育研究所研究員。

剣道の達人と言う身体的素地と深い文学的素養がものふの佇まいを見せている。その彼が貴婦人の衣装に身を包み舞い始めるやいなや、性のみならずあらゆる価値が倒錯し、彼の創る空間に身を委ねるしか無くなる。



原田伸雄

奇しくも作品主義、型の土方巽系と即興主義の大野一雄系、両者のタグマッチにより舞踏の新しい局面が実現するかも知れません。日本の産んだ舞踏は多くの種蒔きびとにより世界に大きな拡がりを見せています。二〇一四年桂勘に随行参加した中日舞踏公演 (Beijing Dance LDTX)。その時の北京のダンサーと観客の熱気には驚かされ

ました。国内でも中央はもとより、京都、東北、九州、兵庫（私に舞踏への縁を繋いでくれた高砂BU T O H協同組合）等各地で多くの舞踏ダンサーが活動されています。国内外のこうした流れを結びつけようと尽力している桂勘始め諸氏と力を合わせ、高知にも舞踏シーンを開拓して行きたいと思っています。その名も「ブトーっていったい何じやらほい」。先日高知で初めて開催した桂勘ワークショップの手応えも上々でした。舞踏草創期には高知県人も多く携わったと聞きますが、その方々との出会いにも期待します。



桂勘ワークショップメンバー

舞踏は一九五七年に産まれてから、舞踏家だけではなく、三島由

紀夫、瀧口修造、澁澤龍彦と言った当時の名だたる知識人の支持を得て発展して来ました。渡来文化

や日本伝統芸能とも全く違う文法を持ちながら、時にはそれらと交わり独特な発展を続けています。

それを定義付けるのは難しく、「最も寒い地点から起ちあげる」「名づけ得ぬものを表出さす」と言った韜晦^{とうかい}な言い回しで語るしか無い代物です。関わっている人々にと

って、個人の救済、解放と言った側面があるのは共通の認識と思われれます。個人の救済、解放が他人に伝わるのか、と言う疑問が残ります。ユングに提唱されている潜在意識、特に共通無意識に到達した表現になった時に他人に伝わりと考えている方が多いようです。自我の解き放たれた瞬間ですね。

ダンサーと観客の協働作業がそこにはあると思われれます。不可思議な物を咀嚼するアゴの強い観客が居てこそその発表の場になるのではないのでしょうか。繋がれ縛り付けられている鎖を解く瞬間を両者が

待っている。そこには魂の交歓があります。

原田伸雄が高校教科書に執筆した文章の一部を拝借して締めくくります。

「舞踏は、私たちは私たち自身を受け入れなければならぬと言ふ事と、他人の独自性を認め、尊重しなければならぬ事を私に教えてくれました。全ての人がいつも社会の規範に従おうとし、彼ら自身の「適合」してないかもしれない部分を隠そうとしたら、世界は息苦しい、色彩を欠いた場所にすぎなくなってしまうでしょう。色で満ち溢れた世界は、個性の多様さが嘲笑われるのではなく、賞賛される場所なのです。この世界が存在する為には、私たちが表現と人間存在の自由を促す舞踏の考え方を取り入れる事が、大きな助けになるかも知れません。」

最後に自己紹介させて頂きます。十八歳で映像作家を志し上京した私は、映画プロデューサー荒戸源次郎に弟子入りしました。当時荒戸主宰の劇団があり、そこでの肉体訓練を経て身体表現に目覚めて

いきました。

一九七〇年代アンダーグラウンドムーヴメントの真つ只中で悪戦苦闘、様々な試練を乗り越え(笑)、手にした物は何も無く、打ちひしがれて高知に逃げ帰りました(笑)。

「ダンスクリーム」と言うスタジオを設立、スタジオ経営は同年の國友須賀に随分教わりました。ダンス指導、作品発表をさせて頂いたこの間は文化振興事業団には多くの助力、ご指導を賜りました。

身体表現の何たるかを国内外に追い求め、様々なメソッドに巡り合い、私の大好きな悪戦苦闘を重ね、最後に辿り着いた所は瞑想でした。そこで私の身体の動きはびたつと止まり、引退を余儀無くされました。そして十年後遭遇した舞踏の印象は「瞑想の親戚」。瞑想経験が舞踏への扉を入り易くしてくれました。

二十二歳頃、荒戸源次郎に確か岩波ホールに連れて行かれ、土方巽の映像作品を見ました。襤褸を纏い、蜃気楼の中で微かに揺れる姿に心を奪われました。この世のものとも、あの世のものともつか

ぬ光景に感じた、深いシヨックでした。私は思いきって「荒戸さん、私アレをやりたいです」ときり出しました。「駄目だ！止めとけ」の一喝でした。

四十数年の歳月を経て、私は今多分アレをやってます。



中日舞踏公演での筆者

(文中敬称略)

おおむら のりこ

一九七〇年高知学芸高校卒業、一九七四年成蹊学園大学卒業、一九七二年荒戸源次郎に師事。「夢二」(鈴木清順監督) 振付け、「鉄拳」(阪本順治監督) コーディネート、「赤目四十八滝心中未遂」(荒戸源次郎監督) 出演。一九九一年〜二〇〇三年高知市にダンスクリーム設立、主宰。現在フリーランスのダンサー、振付家。

赤れんが商家の過去・現在・未来をつなぐ

―絵金のまち・赤岡町家再生生活用プロジェクト―

北山 めぐみ

まもなく、香南市赤岡町・夏の風物詩、絵金祭りが開催されます。お祭りのメインストリートとなる本町通り沿いに建ち、どっしりと構えた広い間口と、鮮やかな赤れんがの塀が一際目をひく建物、それがわたしたちの活動拠点「赤れんが商家」です。



赤岡町の初代村長・小松与右衛門の邸宅として建てられました。

大正期には誂えの靴屋、昭和期にはタバコ靴店として地域に長く親しまれてきましたが、三年前に住まいとしての役割を終え、その年の十二月に建物の歴史にも幕を閉じようとしていました。ユニボが入り、付属屋から順に解体が進み、さあ次は主屋に着手しようとする二日前、「おばちゃん、この家大事なたてもんやき、なんとか残してくれんろうか」と地域住民が所有者に声をかけ、奇跡的に残されました。

時を同じくして高知高専の教員として赴任した私は、学生たちとともに木造建築やまちづくりを直に学ぶ場をつくれなかと考えていました。高専から五キロの距離にあり、ユニークなまちづくりを続けてきた赤岡に魅力を感じ、学生たちとまちあるきを始めました。活動できる場所を探して「おっこや」や「絵金蔵運営委員会」に

顔を出し、ボランティア協力などをしながら働きかけていきました。

そんな中で紹介いただいたのが「赤れんが商家」でした。学生とともに見学をした日はしとしとと雨が降り、付属屋を壊した裏庭にはたつぷりとした水たまりができていました。夏の台風であいた屋根の穴からは室内に雨が降りこみ、白蟻の被害も目立ち健全とは言えない状況にありました。その場には大家さんとその子ども・孫家族が来られていました。八十歳半ばになる大家さんは、子どもの頃に住んでいた記憶をたどり、残せるものなら残したい、けれど傷んでいるのを見るのは心が痛く、個人では到底残せないとお話してくださいました。わたしたちも（これはえらいたてもんやき）と思いつつながら歴史ある建物の状況を知りながら放つておくことはできず、また悩み

ながらも着工二日前に解体をとめた大家さんの決断を無駄にしたいならぬと思ひ、力になりたいと申し出ました。

この商家の象徴とも言える赤れんがは、塀のみでなく、広い土間にもぎっしりと敷き詰められていました。しかし十年以上放置されていたそれは、すっかり黒れんがと化してしまいました。「死ぬ前にもう一度赤いれんがを見たかった」という大家さんの言葉を聞き、家屋の維持に少しでも希望を持ってもらいたいと思ひ、土間の掃除から始めました。二〇一四年十二月、学生・地域住民・行政・建築士会、さらには県外からも集まった約二十人のメンバーでゴシゴシとデッ



キブラシをかけ、赤れんが土間をよみがえらせました。土間を見たときの大家さんの笑顔は忘れられません。その際集まったメンバーの多くは、今も主要メンバーとして関わってくれています。

これを出発点として、赤岡に残る歴史的な建物を守り活用し、そのプロセスを通してまちに愛着を持った人材を育成する、さらには地域の活性化につなげたい。そんな大きな風呂敷を広げ、わたしたちの活動「絵金のまち・赤岡町家再生活用プロジェクト」は船出しました。商家の再生・活用を目指して、ワークショップによる掃除や劣化箇所の修繕、イベントや広報誌による周知活動を展開しています。

歴史・建築・民具が物語る 商家の魅力

これまで赤れんが商家を様々な方に見ていただく機会がありましたが、みなさんそれぞれに感動して帰られます。それだけこの商家に多様な魅力があるのだと、日々関わっているわたしたちも改めて気づかされることがあります。

商家は小松与右衛門邸として建

てられ、造り酒屋として使われました。与右衛門は初代村長として私財を投じて赤岡小学校の建設や香宗川の堤防づくりに尽力しました。大正期には商家の所有者が変わりましたが、広い土間や座敷の繊細な意匠には初代村長の威厳や当時の財力をうかがい知ることができます。また、この活動を通して村長の子孫にあたる小松さんにも出会うことができ、当時の歴史をさらに紐解きたいと思っています。

三年前に空き家になるまで住んでおられた主はあらゆる物を捨てずに大事に取っておられたようで、わたしたちの活動は、とにかく掃除をして大量の物を減らすことか



昭和期の赤れんが商家の様子

ら始まりました。一方で捨てずにいてくれたおかげで、大量の民具から商家の歴史を詳細にうかがい知ることができました。一番の財産は、大正期から始めた誂えの靴屋さんの姿がそのまま残されていることです。

鯉節のような木型が吊り下げられ、革用ミシンや様々な道具で空間が構成されています。そこで黙々と作業していた主の様子が目に浮かびます。昭和期に始めたタバコ屋は、当時官公庁が揃っていた赤岡ではとても重宝されたようです。さらに蔵には大量の器や御膳といったおきやく道具が揃い、多くの客人を迎えていたこと、二階には機織り機や蚕を育てる籠など、

商家内で養蚕をしていたこともわかりました。

このように、商家の建築・民具を見ると近代から現代に至るまで、時代に合わせた多様な使われ方を読み取ることができます。これを過去の時代で留めるのではなく、歴史の重層性を残しながらも現代を生きる空間として未来につなげることがわたしたちの目指すところではないかと感じています。まだまだ商家の再生は道半ばで課題も山積しています。ですが、活動を通して多くの仲間もでき、着実に前進しています。ぜひ一度、赤岡・赤れんが商家へおいでになりませんか？

(七月十六日、十七日の絵金祭りでは、ふたりっこプロデュースの協力による「近代能楽集 葵の上」の上演を行います。)

きたやま めぐみ

一九八三年 神戸市生まれ
絵金のまち・赤岡町家再生活用プロジェクト共同代表。建築設計事務所、奈良女子大学大学院を経て、現在、高知工業高等専門学校ソーシャルデザイン工学科・助教。

オー克蘭ド(ニュージーランド) 個展旅日記③

西悟

二〇一五年八月七日、いよいよ私の個展が開催される日となった。ギャラリーに入り、作品の飾り付



ノースアート SEIGO 個展風景一部

けを見て、ほとんど完全なレイアウト、展示風景には驚いてしまった。学芸員の方に「大変だったでしょう」とねぎらいの言葉をかけると、彼女は「そうでもなかったですよ。三時間ほどで終了しました」と笑いながら答えてくれたのだ。私が飾り付けに携わってもこれほど上手くできないな—と思いつつ、—これぞプロフェッショナルな仕事だ—と感謝の気持ちでいっぱいになったのだ。

「SEIGO展」ジェネシス日本の高知から来たアーティストというタイトルで、ニュージーランドでは全く無名、誰も知らない日本の画家が有名なノースアートギャラリーです。訳だから、普通

に考えてみれば、とんでもない話である。それでもギャラリースタッフはアーティストのためにケータリングを用意し、最高の準備を整えてくれた。

ノースアートギャラリーは四つの展示スペースを持ち、ギャラリーとしてもかなり贅沢な空間を持っている。私の作品はそのうちの二つの部屋で展示されたのだ。それぞれの作品にゆったりとした空間が与えられ、じっくり鑑賞するための最高の空気を醸し出してくれていた。更にギャラリーの別の二部屋ではシンガポールから若手現代アーティストたちのグループ展を同時開催するという、珍しい組み合わせの国際色豊かな流れ



SEIGO 展レセプションパーティー

を作ってくれたのは嬉しかった。レセプションの中でシンガポールの若手アーティストとも、これから先、高知とシンガポールの間で美術交流が生まれる方向を探ってみようという話も自然と沸き上がり、ほんの僅かだが、私にとって新しいプロジェクトが頭の中をよぎる気配を感じたのだ。初めて訪れたオー克蘭ドの地で、小さな出会いがあり、そして大きな交流が生まれ、それが大きく

発展しそうな広がりを感じさせるギャラリーレセプションのひとつであった。そしてこの企画の裏には、ディレクター、ウエンディがシンガポールのグループ展と私の個展を同時開催することによって、私に大きなプレッシャーを感じさせないようにする粋な計らいがあったのだろう。

レセプションには地元の有名人アーティスト、美術愛好家もたくさん来訪し、パーティーでの楽しい美術談義、会話に花が咲いた。私は何よりも嬉しかったのが、多くの方が作品に対してテーマをしっかり捉えてくれたことであつた。今まで見たことも聞いたこともなかった作品に対し、先人観もなく、素直に「あなたの作品を見るとゆつたりとした時間の流れを感じるわ。とても気持ちの良い感覚ですね」、「微妙な色の変化が時間の移ろいを感じます。広い空気感を感じますね」といったコメントがたくさん聞かれたことだつた。

彼らの素直な鑑賞の聲が木霊し、この場所で展覧会の機会を与えられた喜びが溢れてくるのだつた。日本では作品の値段のこと、人間

関係のこゝろを通して作品を判断する愛好家も少なからずいるのは確かである。特に地方では作品とは別のところで芸術作品の善し悪しを見ようとする傾向もある。私自身そういった流れに少々うんざりしていた近頃でもあつた。そんな時、ノースアートギャラリーという私にとって全く新しい地で作品を展示することができ、何の偏見もなく作品と向き合い、何の先人観もなく会話できる機会を与えられたことは、あらためて美術の素晴らしさを知るきっかけとなつた。そして自分自身が創作活動を通して何を求めているのか確認でき、純粋に創作できることの喜びを大きく感じるのだつた。



左からショーン・マクドネル、筆者、ロス・リッチー
(ニュージーランドの著名な画家)

ショーン・マクドネルもこの展覧会を見て非常に喜んでくれた。まるで自分のことのようにしゃいであつた。芸術関係の人を見かけるとすぐに紹介しようとし、交流が生まれるように話を繋いでくれたのだつた。パーティーが終わって、ショーンはホテルまで私を送ってくれたのだが、途中、居酒屋で祝杯をあげようということになった。金曜日の夜ということだったので、そこは多くの人でごつた返していった。何とかテーブルを見つけ、二人で祝杯をあげた。

私はショーンに今回の機会を与えてくれたこと、再会できたことに、彼は私がオークランドにきてくれたこと、また高知でグループ展に参加できたことに、お互いが心地良い気持ちを感じ合つたのだ。最初は本当に小さな細い糸のような繋がりがつたのが、少しずつ太く大きな繋がりととなり、それが様々なところに枝分かれしていく、気持ちいい関係に成長していることに不思議な時間の感覚を改めて覚えるのだつた。そしてショーンのみならず、私も次なる展開をお互いが起こしてみようとジョッキ

を高らかに交わしたのであつた。八月中旬、成田に向かう機上の中で、様々な思いが心の中に沸き上がってきた。ニュージーランドの人たち、風景、芸術などの出会い全てが、私のこれからの創作活動に生かされるであろうと実感するのだつた。そして今回の個展のみならず、様々な方面で私をサポートしてくれた多くの高知、オークランドの知人、友人たちの力添えによって今の私が在るのだと改めて感謝の思いに駆られるのだつた。

夕刻七時過ぎ、十二時間のフライトの後、成田に降り立った。そして私はシャツの下にあふれ出てくる汗と熱気に真夏の中に投げ込まれたことを実感するのだつた。

(終)

にし さとる

画家・土佐塾中高校美術専任講師

ピノキオさんが生まれた国で(第四回) 〜普段着でイタリア〜

並河 咲耶

マントバへ向かう車窓より、こ
んには。

三泊四日の出張から戻り、先ほ
どミラノ・リナーテ空港に降り立
ちました。出張先、ブリュッセル
は、メトロも綺麗で、どんなお店
も英語でも対応してくれ、劇場の
スタッフも優しく、お願いしたも
のは文句の一言もなく、必ず手入
る、という非常に仕事がしやす
い環境で、充実感もあり、ブリュ
ッセル最高！と後ろ髪を引かれな
がらの帰国でした。

…にも関わらず！

ミラノで空港の出口を出た瞬間、
不覚にも「帰ってきた〜」という
思いがどっと胸を突いて出てきた
のです。イタリア特有の、無駄な
人だかりをかきわけ出口に向かい、
南国のむっとするような空気を吸
い込んだ瞬間に、ふうっと体の凝
りが隅々までほぐれていくような

そんな感覚に包まれてしまったの
です。そして、その余韻醒めやら
ぬ状態でこの原稿を書くことにな
りました。



Dario Moretti

これまでの三回の連載では、あ
えてイタリアという国に抱いてい
る私の思いを語ることは避けてき
ました。罵詈雑言リストになりか
ねないと思っただけです。言語を
勉強したわけでもなく、その歴史
や観光名所だけでなく、オペラに
対してすら、何の憧れも夢も抱い
ていなかった私がこの国に漂着し

てしまったのは、間違いも甚だし
い…そもそも私には暑さよりも寒
さの方が肌に合っているのに…と
気候にまで嫌悪を抱いていた時期
さえありました。

そして、どれだけ美味しいお料
理やワインを戴き、素晴らしい自
然や風景、他のどんな国に行こう
とも見ることの出来ない建造物や
美術品を目の前にしても、おお麗
しきイタリア、と簡単にイタリア
を愛することは出来なかったので
した。

なぜならば、例えば、こうして
今、私はマントバ行きの電車に乗
っていますが、この電車が時間通
りはおろか目的地にすら到着しな
い、ということが、イタリアとい
う国では日常茶飯事のように起き
るからです。空港に向かっている
際に、まさしくそんな事態が発生
し、電車が停止した駅から空港ま
でタクシーに乗らざるを得なくな
った日のことは、今でも忘れるこ
とが出来ません。

そういう、今まで私が生活して
きた土地では常識的には認められ
ないような「仕事」(そしてその
仕事をする人々)が、当たり前

ように存在する、どころか君臨し
ていることが多すぎるように思え
たからです。

それでも、私がイタリアで暮ら
し続けていられるのはなぜなの
でしょう。

一つには、なんといっても動物
的本能のおかげです。生物が持つ
環境への順応力とは素晴らしいも
ので、時間の経過と共に、以前で
あれば憤怒に煮えくり返っている
ような場に出くわしても、憤りや
ストレスを感じる事がだいぶ減
りました。

アメリカでの七年間からは、笑
って挨拶が出来て、感謝の気持ち
が伝えられれば、誰とでも気持ち
よく暮らしていける、ということ
を学びましたが、ここイタリアで
は、何か予期せぬことが起きても、
怒らず笑い飛ばして前へと進むた
めの諦めの術を手に入れました。
この国で生存するための最高の護
身術。人生、諦めも肝心。一つ、
いい諦め方も学ばねば、身の破滅
です。私もお陰さまで、白髪が数
本生えてきたように思いますが、
そのくらいで済んでよかったです思

っています。

と、随分と皮肉めいた言い方をしました。が、大多数の国民が、理性よりも個人の生理的本能に従って暮らしているようにしか思えないこの国の魅力の一つが、このよくな冗談なのか本気なのか分からない、ギリギリの風刺の精神です。関西人がギャグに磨きをかけるように、イタリア人は、頓知のようなアイロニーをそつと懐に忍ばせていて、その晴舞台が街中のありとあらゆる所に存在する、BARという場所なのではないかと推測しています。

小さな村から都会まで、どんな時間でも人が途絶えることのないバー。そこでエスプレッソをくいつつひっかけて（お猪口ではない、…！）なんの血の繋がりもない、通りがかりの見知らぬ人にも率先して声をかけ、冗談を言い合っただけの一日が始まる。1€の珈琲を飲んだだけのはずなのに、バーを出るときには自然と笑みがこぼれている。

言葉がたどたどしく、オーダー

するので精一杯だった頃は、挨拶されるだけでも恐怖体験でしたが、今では、よく見る顔には「あれえ、そんなに疲れてるのに、まだ年金もらえないの？」などと、だいぶきわどい冗談も言えるようになってきました。すると、横にいたおじさんが、にやつと笑って面白がって口を出してきたので、話を聞いていたら、マントバで歴史的老舗の御菓子屋さんのご主人でびつくり！なんていう出会いもあります。



Lai Moretti

ああ、憎らしくも、なぜか愛おしいイタリア。

たとえ電車が三時間遅延になっても、「しょうがないよね、イタリアだもんね」とどんな観光客をも納得させてしまうイタリア。

自己中心的で、凶々しく、破天荒で、我がままでも、カリスマ性

さえあれば許されてしまうイタリア。このイタリア、という単語を元首相、という単語に置き換えることも出来そうな国民性。

というわけで、イタリア人⇨他人のことなどおかまい無し、自分勝手かつ単純と思いつけていますが、裏を返せば、相手がどれだけ「アモーレ（愛）」を持って接してくれているかが感じられれば、突如いい人になるのです。つい三分前までは「他人」だった隣の席のおじさんだって、何かきっかけを見つけて話しかけてみれば、「他人」ではなくって態度がころつと変わる。話し好きで、おせっかいで、根は優しく、実は人情に厚い。

それがあまりにも分かりやすく態度に表れるのです。例えば、空港を降り立ってバスを探していると、運転手のおじさん達が喧々譁々、互いの人生相談でお客さんなどそつちのけで盛り上がっていました。その様子があまりにも微笑ましくて、つい、「イタリアだつていいところ」と思いながらバスに乗ろうとすると、英語で声をかけてくれます。が、私がイタリア語が話せると分かった途端

「なんだイタリア語しゃべれるのか、英語で話しちゃったよ」と冗談なのかよく分からないコメント…。結局イラッとするので、「あああ：帰ってきてしまった！」と頭を抱えるような、残念な思いだけが募るのでした。

これからも、そんな愛憎の念を抱きながら、なんやらかんやら、まだまだイタリアでの暮らしは続くと思われまふ…。

なみかわ さや

日本で生まれ、高校・大学とアメリカで異文化の洗礼を受けた後、帰国するも、現在はイタリア在住。合同会社 *Konja* 代表として、舞台や文化に関わる翻訳・通訳業務、日本へのイタリアのアーティスト招聘事業を行う。イタリアでは、ダリオ・モレッティ氏の主宰するテアトロ・インプロヴィーズでピアノ・打楽器演奏、経理を務める。一児の母。ご意見・ご質問等、お待ちしております！

konjainternational@gmail.com
www.teatroallimprovviso.it

高知の「フクちゃん」

フクちゃんが生まれて八十年



横山隆一記念まんが館 奥田奈々美

大学帽に坊主頭、下駄履きがトリードマークの男の子・フクちゃん。高知市出身のまんが家・横山隆一が生んだ国民的キャラクターです。フクちゃんが生まれてから八十年の記念年にあたる二〇一六年、その魅力が改めて見直されています。

一九三六年一月、『東京朝日新聞』東京版で、隆一にとつて初めての四コマまんが連載が始まりました。タイトルは「江戸っ子健ちゃん」。東京の下町の日常を描き、実写映画化されるほどの反響を呼びましたが、この人気の要因となっていたのは、脇役として登場していたフクちゃんでした。主人公の健ちゃんが優等生だったのに対し、元気でやんちゃなフクちゃんが、「どこにでもいそうな近所の男の子」として親近感を持って受け入れられたのかもしれない。

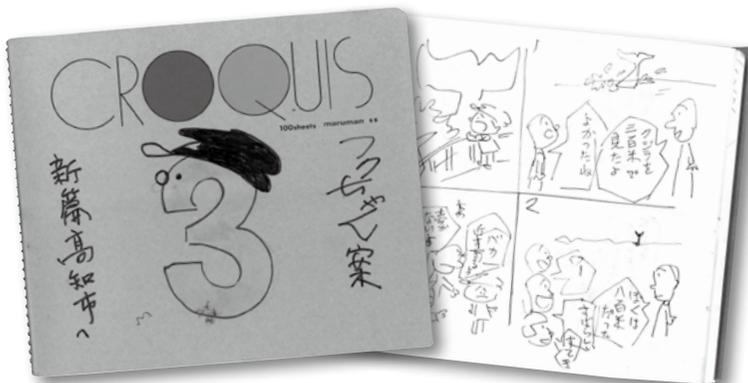
同年秋、全国紙へと移るタイムミングで主人公を交替し、タイトルも「養子のフクちゃん」と変更。裕福な伯父（フクちゃん）とおじいさん（と呼ぶ）の跡取りとして養子に行くところからはじまる本作は、下町育ちのフクちゃんがお金持ちの暮らしに馴染めずトラブルを起こす——といった展開でしたが、隆一自身が未経験の世界を描くことに限界を感じたことから、しばらくしておじいさんに豪邸を放棄させ、長屋暮らしに戻しました。そうして「庶民の目線」を再び手にしたフクちゃんは、日本国中から長きにわたって愛される存在へと成長していきます。こういった経緯から「フクちゃん」の作中には両親がほとんど登場しません。家庭内の

対話にも限界があり、隆一はかなり苦心したようです。しかしこの苦勞が、フクちゃんとおじいさんの絆、また近隣の人々との交流を描くことにもつながっていったのでしよう。「フクちゃん」の連載は、タイトルや掲載紙面を変えながらも続き、『毎日新聞』での一九五六年からの連載は十五年間、五五三四回にも及びました。

開館準備が進んでいたことから、高知での四コマまんが連載を構想していたようです。描くのをやめていた四コマまんが、そして「フクちゃん」を復活させようとするほどに、隆一の高知に対する思い入れが強かったことがうかがえます。この案ノットは、四月二十九日～六月二十六日に横山隆一記念まんが館で開催した「みんなの友だち・フクちゃん展」で初公開しました。高知での「フクちゃん」連載も、隆一次男の横山隆二さんの企画により、広告制作会社ドッグ・クリエイティブ制作で実現。タイトルを「土佐っ子フクちゃん」とし、フクちゃんが高知に帰って来たという設定で、二〇一六年四月一日～六月三十日『高知新聞』で連載されました。これを機に、フクちゃんは高知県民にとつてよ



「養子のフクちゃん」第1回



高知版「フクちゃん」(未発表) アイデアノート

り身近な存在となったようです。「みんなの友だち・フクちゃん展」では、このほかにも、高知とフクちゃんの縁の品々を展示紹介しました。中でも目を引いたのが、六×四メートルもあるフクちゃんの大さなフラフです。二〇〇三年によさこい祭り五十年を記念して協同組合帯屋町筋が制作したもので、商店街アーケードに飾られて

いましたが、本展開催にあわせて、横山隆一記念まんが館へ寄贈されました。桂浜や日曜市などを背景に鳴子を持ったフクちゃんが踊る絵柄で、高知とフクちゃんの魅力が凝縮されています。このような足跡は数多く、今もフクちゃんが高知のどこかで遊んでいるかのようにです。今後高知県民の「近所の男の子」として、生き続けることでしょうか。ぜひ、横山隆一記念まんが館に会いに来て下さい。



帯屋町商店街にかけられていたフクちゃんのフラフ



平成28年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業

フクちゃん誕生80年記念

フクちゃんとあそぼう！～ペーパーアートとおもちゃで“昭和”～展

会 期：7月16日(土)～9月25日(日) ※月曜休館・但し7月18日と9月19日は開館

観覧料：一般600円／小学生～高校生300円(企画展のチケットでまんが館常設展示もご覧いただけます)

場 所：横山隆一記念まんが館 (TEL 088-885-5029)

乗り物や昭和の風景をペーパーアートにする太田隆司さんとフクちゃんのコラボ展示が出現！本屋のための高知新作も必見です。その他、フクちゃんの時代をもっと知るため“昭和”を振り返る玩具や写真も併せて展示します。

会期中は、たくさんのイベントも予定しています！

| | | | | |
|---------------------|----------------------|---|--------------------|---------------------------|
| 7月16日(土) | 10:00～10:20 | 展示オープニングイベント 「光の切り絵&お絵かき花火」ちょっと紹介 | まんが館 魚々タワー下 | 要観覧料 |
| | 10:30～11:30 | 太田隆司・酒井敦美ギャラリートーク | 企画展示室 | 要観覧料 |
| 8月5日(金) ～7日(日) | 10:00～16:00 | お絵かきアトラクション (リコー紙アプリ) | 企画展示室 | 要観覧料 |
| | | | | |
| 8月20日(土) | 14:00～15:00 | 太田隆司ワークショップ 「太田隆司のペーパークラフトに挑戦」 | まんが館 まんがライブラリー2 | 対象：一般 参加費500円 要事前予約 |
| 9月11日(日) | 10:30～15:00 | 「鉄道大好き！」鉄道HO模型公開運転会 | かるぽーと 3階ガレリア | 参加無料 |
| 9月17日(土)・ 18日(日) | 日没(18:30頃) ～20:30 | 光の切り絵・野外幻灯「子どもの時間」 ※まんが館展示室も夜間開館(～20:00) | かるぽーと 北広場～3階 | 参加無料 ※小雨決行 |



野外幻灯イメージ



鉄道大好き！イメージ

5月の事業から

Let's sing together! うたぶね in 高知

平成二十八年五月七日・かるぽーと大ホール

東京・新宿で昭和三十年代の大ブームから「うたごえ」を守り続けている「歌声喫茶ともしび」のメンバーを招き、来場者が皆でともに歌えるうたごえコンサートを実施しました。

「思いっきり歌いたい」「大勢で一緒に歌いたい」「青春時代に戻れる」……。チラシの「うたごえ」の文字を見た方、定期的なうたごえの活動をしている合唱団の方の口コミで、中高年を中心にそんな思いを持った四百名がかるぽーと大ホールに集いました。

参加者全員に歌集を貸し出し、会場からの二百曲を超えるリクエストの中から約二十曲を、身振り手振りをつけながら大きな声で歌い交わしました。

「なつかしい」「若い時に高知でうたごえ喫茶に通った」「こんな催しをぜひ続けてほしい」という意見を多数いただきました。選択に困るほどの種々の文化イベントが日常的に行われているようでいて、実は六十歳からの年代が参加する場が非常に少ないと気づかされ、これらの声に込めていくことも、今後の文化振興事業団の課題のひとつと感じました。

歌唱曲「みかんの花咲く丘」「カチューシャ」「青春時代」「なごり雪」「かあさんの歌」「学生時代」など。



〈入場者数・三九四名〉

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう!

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円(4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで)

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

Forever Plaid

五月十一日、かるぽーと大ホールにおいて、オフ・ブロードウェイミュージカル「フォーエヴァープラッド」を開催しました。今回は、その舞台裏を少しお話ししたいと思います。

出演は、俳優やナレタとしても活躍中の川平慈英、ジャニーズ事務所のアイドルグループV6の長野博、ロックバンドSOPHIAのボーカリスト松岡充、ミュージカル俳優の鈴木壮麻の四人。二〇〇三年に初演し、今回が再演となる四人の息はぴったり。仲の良さが随所に垣間見えましました。

会場入りし、舞台を確認、マイクチェックが始まると、陽気な声で周囲を笑わせるムードメーカーの川平さん。それにつっこむ鈴木さん。二人で高知城に上るなど仲良しの二人。ここにこ笑いながらそれを見守っている長野さん。川平さんに負けじとマイクチェックでポケまくる松岡さん。お客さんは誰も居ないけれど、周りのスタッフを笑わせ、楽しませようとする心遣いは、さすがだなと感じました。

お客さんが入ると、さらに気持ちはヒートアップ。一緒に歌ったり、踊ったり、舞台から降りてプレゼントをしたり…。一人の男性を指名して舞台上げたかと思うと、

伴奏を弾かせて共演したりと、終始笑顔の絶えない良質なライブショーでした。

本公演のもう一つの特徴は、グッズ販売のすさまじい売れ行きです。筆者の記憶する限り、ここ十年では最高の四百二十七点ものグッズが売れ、数十万円もの売り上げを記録しました。

終演後、あまり見ることのないスタンディングオベーションで賛辞を送ったお客さん。「高知のお客さんはノリが良いねえ」と川平さん、上機嫌で鈴木さんと仲良く歩いて帰路につきました。

（入場者数・六百四十二名）



高知市文化振興事業団 出版物のご案内



高知県文学散歩

岡林清水 著

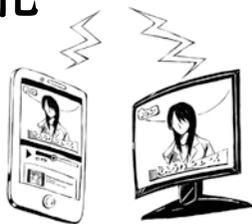
— 色とりどりの高知の文学をのぞいてみんかよ？

高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く「旅の中の文学史」ともいえる文学案内。（平成三年刊）

価格 1,887円（本体価格 1,748円＋消費税）

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち
高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071へ

テレビ文化



風俗歳時記

番組やCMを通して時代を牽引してきたテレビの役割が、大きく変わりつつある。子どもや若者が、地上波のテレビを見ないで、パソコンやタブレット、スマホなどで動画を見る機会が増え、テレビ離れが進んできているのだ。かくいう我が家も、子どもは自室のパソコンで年間数十本のハリウッド映画を見るのが習慣になっている。

日本でテレビ放送が始まったのは、今から六十三年前。放送が始まったばかりの頃は、受像機の価格が高く、各家庭というより人の集まる場所や駅などに置かれた。商売をしていた私の実家には、よく近所さんがテレビを見に集まっていた

たぞうだ。一九五九年の皇太子殿下御成婚の年に一気にテレビは普及し、次々に時代を代表するドラマや歴史を彩るバラエティ番組、俳優やスターが生まれた。携帯など多様なメディアが普及してくると、電波帯域を空けようと、二〇〇六年にテレビ放送はデジタル化され、高画質・高音質の番組が楽しめるようになった。では、テレビ番組はさらに見られるようになったのか？答えはNO。録画機能が簡素化し、繰り返し録画作品が視聴でき、パーソナルメディアで、ユーチューブや見逃し配信の動画が気軽に楽しめるようになった。家族の誰かがつけていたテレビが、一人世帯の増加で、一日中電

(立花香)



高知を撮る

第32回写真コンテスト入賞作品

ほのぼの奉納相撲

(平成27年8月 本山町上関)

篠原 真弥

初めて訪れたあみだ堂の奉納相撲。連なる懸賞金や「飛びつき三人抜き・五人抜き」など私にとっては全く目新しく、興味津々。家族や特に小さなお子さんたちの声援に、アット・ホームなこの伝統行事がいつまでも続きますようにと願わずにはいられませんでした。

tosacco とさっ子★タウン TOWN

とさっ子★タウン 2016

「とさっ子タウン」はこどもだけのまち。こどもが楽しみ、学びながら未来を考える取り組みです。仕事をしたら税金を納め、残ったお金は遊びや学びに使い、貯金もできます。新しくできた友達とも協力しながら社会の仕組みを体験し、学びます。

2016年8月20日(土)・21日(日)
11:00~17:00

高知市文化プラザかるぼーと
市民ギャラリー第1~5 展示室ほか
参加費 1,000円(要申込)

<http://tosacco-town.com>

【お問い合わせ】
高知市市民活動サポートセンター
088-820-1540



高知市立中央公民館事業

第66回 高知市夏季大学

○7月25日(月)
『3.11を忘れない一被災地・被災者とは何か』
武田 真一(河北新報社 防災・教育室長)

○7月26日(火)
『働くことは生きること 逆境が私を育ててくれたー』
中園 ミホ(脚本家)

○7月27日(水)
『少しの努力で“できる子”を育てる! 池田清彦の子育て術』
池田 清彦(生物学者・早稲田大学国際教養学部教授・山梨大学名誉教授)

○7月28日(木)
『写真で伝える世界、東北の“今”』
安田 葉津紀(フォトジャーナリスト)

○7月29日(金)
『自分らしく生きよう』
小川 理子(パナソニック株式会社役員・ジャズピアニスト)

○8月1日(月)
『人生捨てたもんじゃないですね』
笹野 高史(俳優)

○8月2日(火)
『江戸時代から発想するー経済・教育・防災ー』
磯田 道史(歴史家・国際日本文化研究センター(総合研究大学院大学)准教授)

○8月3日(水)
『高知の10代を元気に 高知の地域ビジネスの可能性』
椎木隆太(株式会社ディー・エル・イー代表取締役)
椎木里佳(株式会社AMF代表取締役)

○8月4日(木)
『震災後の社会変動と社会運動』
小熊 英二(慶應義塾大学総合政策学部教授)

○8月5日(金)
『心を鍛える』
荒木 香織(園田学園女子大学人間健康学部教授)

■日時
7月25日(月)~8月5日(金) 18:30~20:00
〔土・日曜日は休講の10日間〕

■会場
高知市文化プラザかるぼーと大ホール

■料金
通し券(受講料は10日間通しの料金です)
一般3,600円 割引2,600円

■お問い合わせ
高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

収集癖

「男は道具だ」という話を前に書いた。これは話の一部で、その男たちは「しばしば収集癖を起こす」という部分も大いにある。十年以上も使わずに眠っている道具はコレクション以外の何物でもない。ただ単に収集を極めたいという、手段が目的になっているだけなのではと……。

「なんでも鑑定団」などを観ていて

も、連れ合いに「ゴミ扱いされながらせつせと収集している男たちがずいぶんたくさんいる。傍から見るとガラクタに見えても、本人にするといたって真面目に収集しているさまは、失笑を超えて哀愁さえ漂ってくる。

男はどうしてこう「収集癖」があるのだらう。しかし昔は女性だってコレクションをしていた。あのエルミター

ジュ美術館のコレクションはエカチエリーナ二世の収集が最初だし、ニューヨーク近代美術館もロックフェラー二世夫人をはじめとする三人の女性たちのコレクションが最初であったというのだから、収集癖は男女を問わない。とはいえ、こうした名だたる女性たちも、「海賊とよばれた男」の道光佐三のコレクションにしても、しっかりと一流のものであるのに、世の多くの収集家のお宝がガラクタなのはなぜなのか。そもそもの見分けの目がないのってしまえばそれまでなのだが……。

先に挙げた名だたる収集家のコレクションは、目の肥えた画廊主や目利きの骨董家が収集し、そんな人たちの味方につけるだけの財力と人を魅きつける人間的魅力があったからに違いない。買ったモノは、やはり日の目を見ず、偽物の山が数々あるに違いないと、私は思うのだが。

(霖)

今号の表紙

「しろくまとペンギン」
森澤 千颯

今年の夏はしろくまやペンギンでも涼しく過ごせる夏だと良いな、と思い描きました。

(もりさわ ちはや/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

文化庁 平成28年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業

フクちゃん誕生80年記念

フクちゃんとおそぼう!

～ペーパーアートとおもちゃで“昭和”～展



期間 2016年7月16日(土)～9月25日(日) 9:00～18:00
月曜休館 但し7月18日,9月19日は開館 ※初日7月16日は10:00開場

場所 横山隆一記念まんが館・企画展示室

料金 ● 一般 600円(団体500円・割引300円)

● 小学生～高校生 300円(団体240円・割引100円)
企画展の観覧料で常設展示も併せてご覧いただけます。

※団体20名以上 ※割引65歳以上の方及び身体障害者手帳(1,2級)、療育手帳及び精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方とその介護者1名

【主催】高知市、高知市教育委員会、公益財団法人高知市文化振興事業団 横山隆一記念まんが館
 【協力】太田隆司、酒井敦美、高橋俊和、カリノ美工、高知県立歴史民俗資料館、鉄道友の会四国支部
 ビー・ブレイブ、リコージャパン高知支社
 【後援】高知新聞社、NHK高知放送局、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSS高知さんさんテレビ、KCB高知ケーブルテレビ、
 エアエム高知、高知シティFM、朝日新聞高知総局、毎日新聞高知支局、読売新聞高知支局



横山隆一記念まんが館へは、高知市文化プラザからE-73階入り口よりご入場ください。

横山隆一記念まんが館 〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化プラザからE-73階入り口内 TEL088-883-5029 FAX088-883-5049 <http://www.kfca.jp/mangakan/>